プロレタリア通信

第12号
1988年7月15日
1部 100円
〒170-91
東京豊島郵便局
私書箱59号

発行「プロレタリア通信」編集委員会
☆万国の労働者団結せよ!!
☆被抑圧民族の解放!!
☆帝国主義打倒・プロレタリア独裁・社会主義
☆スターリン主義打倒・国際非合法党の建設!!

当面の任務について

リクルートコスモスの公開前の株譲渡事件は、各界に大きな波紋を投げ掛けている。前リクルート会長の江副は、政界や財界に地位を築くために、竹下首相、宮沢蔵相、安倍自民党幹事長、渡辺政調会長、中曽根前首相、塚本民社党委員長、森田日経新聞前社長などに値上がり確実な非公開株を譲渡し、各人に何千万円もの利益をもたらした。こうした「濡手で粟」のぼろ儲けは、人民大衆の怒りを引き起こしているが、マスコミの社説の唱えるように、「株式公開制度の民主化」とか「株式売却益への課税の強化」とか「政治倫理の向上」とかいったことで、こうした腐敗が無くなるわけではない。

現代は、帝国主義の時代であり、日本は六大金融資本の支配下にある。こうした金融寡頭制の下で、自民党の独裁支配が何十年も続いている。有力政治家を金の力で意のままにしようとする人間が何人でてこようと別におかしくはない時代である。ロッキード事件の小型版にすぎない。

こうした自民党政治の腐敗が深まり、寄生性が強化されつつある時、まさに「消費税」の導入が画策されている。これは実質的な増税であり、とくに貧困層にとって特にそうである。日本の自衛隊は、今年は世界第三位の予算をあてがわれ、最新兵器で着々と武装しつつある。いわゆる「防衛費」は、韓国の国家予算の一、七倍あるということである。こうした膨大な軍事費や赤字国債の利子補填、国家的投資による海外侵略のための資金、公共投資などの財源を生み出すことが、消費税導入による増税の狙いであろう。我々は断固として、自民党政府の軍拡と経済侵略と大衆収奪の増税路線に反対しなければならない。

臨時国会では、監獄四法案の審議も開始されようとしている。階級闘争の激化にそなえて、監獄を強化し、代用監獄を存続させようとする監獄四法案には絶対に反対しなければならない。

竹下自民党政権は、中曽根前政権の延長上の路線をとっている。軍拡、増税による大衆収奪、国家機密法の整備、世界侵略の推進である。日本帝国主義の全社会的再編は、税制改革として着々と進んでいる。貿易の自由化圧力を利用した農業の切捨てと再編もその一環である。日本の労働者階級は、「連合」に結集したような特権的・労働貴族的な企業別労働組合のヘゲモニーの下で、低賃金、長時間の非人間的労働を強制されて居る。これが、日本資本主義の世界一の輸出競争力を支えているのである。我々は、労働時間の短縮、週給二日制の実現、賃金の増加を勝ちとり、各職場、各工場に労働者階級のヘゲモニーをうちたて、闘争力を強化すべきである。

日本帝国主義が世界中の富を集中するにつれて、アジアの国々から出稼ぎ労働者が多数やってくるようになった。我々は、排外主義や民族差別と闘いつつ、アジアの労働者階級の人権を防衛し、団結を深めていかねばならない。

日本帝国主義はたしかに世界一の債権国になった。しかし、これはマスコミやブルジョア政府が宣伝するように、日本の労働者階級人民が豊かになり、解放されたことを意味しない。マルクス主義の裏切り者でない限り、我々は、資本蓄積の一般的法則がこの日本の資本主義社会にも貫徹していることを認める。富の蓄積の対局には貧困の蓄積があり、労働者階級の増大とともに、その階層化が発展し、相対的過剰人口が増大し、下層のプロリタリアートが発展する。上層の良質な部分の組織化とともに、下層の大衆の組織化をあらゆる手段によって遂行しなければならない。未来は、団結したプロレタリアートのものである。党的団結をうちかためつつ、こうした基本的任務を一歩一歩果たしていこうではないか。

政治組織路線について

――我々はどのような政治をめざしているのか――

我々は、この三十年間の新左翼の政治を継承するものである。

新左翼の政治とは、全人民に選択を迫るところの政治・権力をめぐる政治であった。しかし、その政治とは、議会主義的なものとしてではなく、街頭実力闘争としてあった。また、学生運動を中心とするものであった。我々は、こうした政治を継承しつつも労働者運動と労働組合運動を敗北させてきたことに十分な考慮をはらうことを通して、ふたたび新左翼運動を蘇らせるものである。

とりわけ、我々は、七十年安保闘争を前にしてまったく新たな地平を切り拓いてきた。敵を如何に倒すかということと同時に自らの権力をどのように樹立するのかという、主体形成の政治闘争が本格的に問われたのである。七十年闘争に問われた質にこたえることこそ、我々の新たな政治であり、独自の政治でなければならないであろう。

A　如何なる新左翼か

『戦後革命運動から何を学ぶか』で概念規定したような主観的な意味での新左翼について述べようとするのではない。

世間で通常語られているところの、いわゆる新左翼である。社会党や共産党と異なる左翼のことである。我々の主観的意図とは関係なく、客観的に存在している左翼のことである。この左翼は、七十年闘争を闘う過程でその多くは誕生してきた。しかも、日本共産党からはじめは構造改革派として、次いで中国共産党・毛沢東派として相次いで脱党・除名されることによって新左翼の隊列に加わった緒グループも含めて、今日、世間では新左翼と呼ばれているのである。また、六十年安保、七十年安保闘争の激動のなかで共産党ばかりか社会党からさえその議会主義の枠を突破してきた多くのグループを生みだしているし、七十年代以降、被差別解放闘争を自己解放主義の旗を掲げて全国的規模で新左翼の力となっている。社会党や共産党によって福祉の対象とされてきた社会各階層の被差別大衆が自らの尊厳をかけて闘いに決起してきた。

こうして、いまや新左翼は、学生運動に限定されることなく、すぐれて社会のひとつの政治潮流となっている。いわば、社会党や共産党に組しない政治潮流がある特定の運動としてではなく広範に全社会的に存在している。これが客観的には新左翼である。

思想的に雑多なこうした現状を肯定することなく、むしろ新たな政治の形成に向けて、否定的現実としてとらえきらなければならない。我々の政治とは、こうした現実を全面的に再編するところの政治でなければならない。かかる意味では、新左翼それ自身を全面的に変革することでなければならない。

我々は、新左翼の原点。その立脚点に立返り、反芻しつつ前進するのでなければならないであろう。

新左翼が客観的に全国的広がりと全社会的深さで存在しつづけていることに安住するなら、我々に政治的展望はない。

我々は、あの七十年代闘争で本格的な政治の形成に失敗した。とはいえ、切り拓いた地平を防衛し発展させることによってしか、今日のこの混迷を打破することはできないと確信するものである。雑多な思想に核心を与え、脈絡のない運動と政治に背骨をたたきこまなければならない。それには、あるがままの運動や政治に迎合することではなく、全く独自の運動と政治を形成してゆくことである。

その運動と政治とは他ならぬ本格的政治にこたえようとすることである。カッコつきの「思想による統合」などではなく、実践的な方針、具体的行動によらねばならない。そのこと抜きに「思想の統合」もまたあり得ないであろう。より直截には七十年代武装闘争を承認した地平で新左翼は再度打ち固められなければならない。

B　侵略・軍事空港粉砕の旗をかかげて

かつて三里塚・芝山農民は「党派が農民を利用して政治を張るなら、農民も党派を利用して反対闘争をつづける」（『たたかう野菜たち』）と述べた。

農民をしてかく言わしめた新左翼の政治とは何であるのか。

我々が三里塚に足を運ぶのは、第一に日本資本主義の帝国主義的膨脹の必然としての空港建設に反対するからである。空港が輸出入の最大の拠点となっており、侵略の最前線になっているからである。我々は、自らの思想、自らの政治主張を実現するために三里塚に足を運ぶのである。第二に、現地で百姓をしつづけるために反対する農民を支援しつづけることである。

しかしながら、八八年現在、三里塚芝山連合空港反対同盟は、三つに分裂した。この三つに分裂する経過は、おしなべて、その党派に起因していることが農民によって語られる。

とまれ、七七年開港以来、三里塚芝山では既成事実化が進行している。とりわけ、二期工事＝B・C滑走路建設に向けた工事は急ピッチで進められ、B・C滑走路予定地内にある農家は、その矢面にたたされている。

七七年の開港以来、空港利用者の増加と反対同盟の分裂ともあいまって、三里塚闘争は重たい存在となりつつある。三里塚から自然と足が遠のき、しまいには、三里塚闘争は終わったのではないかという人にさえ出会うことがある。勿論、この話は市民社会での会話ではなく、新左翼のなかでさえそうなのである。かかる意味合いからして、三里塚は、いまや新左翼の象徴的な闘いとさえなっている。このような「象徴」にしてしまったことを自己批判的にとらえかえさなければならないであろう。

農民と我々の間の「利用したり、されたり」の関係を先ず問わなければならないし、開港と合せて、外国人労働者の問題やアジア諸国人民との連帯のありようも三里塚を通してもう一度問われなければならない。

A章で述べたように社会党・共産党に組しなければ新左翼とすることに我々は抵抗する。それを基盤としつつも抵抗するのである。だがしかし、単に自己の勢力拡大の場としてのみの政治、あるいは囲い込みの政治（革共同的政治）とも、我々は訣別するのでなければならない。市民主義的街頭闘争と軍団政治（革共同）との訣別である。

八三年五月反対同盟の分裂と支援の分裂は、実力闘争主義と話合い路線の分裂としてあったのではけっしてない。むしろ、反対同盟多数派（十対一の割合いで分裂）による党派排除としてあった。我々は、何よりもこの事に重大な関心を払わねばならない。我々は、そのうえでなお、反対同盟多数派を支持して共に闘ってきた。反対同盟多数派は、実力闘争を放棄したのでも、一坪共有地の再共有化運動で金儲けをしようとしたのでもないことは、この五年間の闘争によって証明されている。

我々が反対同盟多数派を支持したのは、したがって、新たな党派政治を模索してである。旧来の党派政治・利用と被利用、または党派による強制（統制）に対して、当該の自由意思による思想の発展・イデオロギー闘争を通した団結である。当該にコビを売る支援（革共同）の在り方を根本的に問うものとしてあることは自明である。言い替えれば「自己解放主義」

のぶつかりあいによって、思想闘争・生きざまの闘争としても三里塚闘争はあると自覚したからにほかならない。しかしながら、三里塚闘争は運動として大きな転機にある。この運動の転機にあたって、我々は、我々のスローガンをどのように定めどのような隊列を形成することによって新たな政治潮流をめざそうとしているのかを提示しなければならない。

三里塚を新左翼の象徴としてはならない。「二つ三つの三里塚」を実現することに努めるとはいえ、三里塚を基準とする枠を明確にしつつ我々は我々の政治を展開するのである。

いまや、三里塚は最も重たい政治的課題となっている。三里塚は過激派の代名詞とさえなっている。逆にそれ故にこそ、三里塚に結集することとそれ自身が最もやさしい新左翼の政治となっているのである。

我々独自の政治とは何か。

我々はどのような政治潮流をつくろうとしているのか。

我々は、我々の経験が示す通り階級闘争のあり様を固定化しない。議会闘争もあれば、市民運動・消費者の闘い、また生産者の闘い、そして反差別の闘いなど、その闘いの表現それ自身を特定なものとして押出さないと同じく、必要とあらば武装闘争もまた辞さないのである。勿論、六十年代前半の共産党や今日の労働党のように「時期が来れば武器をとる」というような政治であってはならない。

我々の政治とは、A章で述べた通り「アレもコレも新左翼」という現状を打破することであり、第二に主観主義的党派政治とも異なる政治である。かかる意味においては新左翼の左派の結集であり、新たなブント主義の建設としての政治である。

C　六十年代労働運動の諸特徴

我々は、何等の抵抗も組織できず全民労連の結成を許してきた。全民労連は明らかに戦後民同型組合主義の終焉である。そしてより一層の主体的な右傾化である。それは疑いもなく国際金属労連主導の労働組合運動となってゆくであろう。そして、組織労働者の七割は結集するであろう。

だがしかし、全民労連は、稼働労働者人口の五分の一も組織することはできず、企業別労組連合であるにもかかわらず、政治的政策要求をかかげる以上社会との結び付きはより深刻なものとなっていかざるを得ないであろう。

全民労連は企業別労組連合として共産党排除を打出し階級闘争論を否定し制度的改良と現在的「平和と民主主義」（帝国主義政治）をスローガンとして発足した。いわば、日本型社民と民同型組合主義さえも否定したところでの労組運動の再編である。そして、このような労組連合を許した新左翼三十年の自己反省が問われるところである。この敗北を単に「闘うナショナルセンターの構築」などとして少数派を自己目的化することではなく、新たな革命的激動に向けて反差別の闘い、地域政治闘争を階級的労働者運動として構築してゆくのでなければならないであろう。この敗北を教訓としてただ一度の勝利に向けて労働者階級の階級意識の形成に第一歩を踏み出すことである。

労働運動はまったく新たな思想と運動を要求されている。既存の意識と組織によりかかった運動であってはならない。大胆に現状を訴えなければならない。しかも企業毎の事柄にのみ縛られているかぎり排外的戦闘性さえ引出せないであろう。戦後民同型組合主義は、第一に企業別排外主義としてあり、第二に公共企業体労働者の親方日の丸的な戦闘性にあった。このことは疑いもない事実であった。この二つがいまや解体されつつあるのであり、その復活にかけることは誤りだと言わねばならない。なぜなら、そのようにして形成した戦闘性はいずれ企業意識・排外思想にすぎないからである。このような意識こそが水俣病を拡大してきたのである。つまり、企業害（公害）に対する内部告発さえ許さないブルジョアイデオロギーを形成してきたのだ。現に、いまなお形成しているのだ。石油を中心とする科学産業の第三世界への輸出とあらゆる薬害は告発されつづけてているにもかかわらず、内部告発はあまりにも少ない。

全人民政治、階級的労働運動を通して全く新たに労働者運動は再生されなければならないのである。その中心的な環に反差別闘争はすえられなければならない。

このように労働者運動によって全国政治闘争は牽引されなければならないのである。もはや、学生運動と若き共産主義者が時代の主流ではなく、明確に労働者が時代の主流たることを自覚せねばならない。文字通り、労働者があらゆる階層の闘いを指導しなければならない。

六十年代労働者運動の諸特徴は以下三点にまとめられるであろう。

一、日本共産党の拠点地区・細胞の反代々木化とブント結成への合流。

ーー三菱長崎造船、大阪中央電報電話局・東京南部地区委員会などーー

一、六十年安保、大管法、日韓闘争後学生活動家が工場や地区に配置される。

ーー全電通・全逓・中小未組織の組織化ーー

一、ベトナム反戦闘争を軸とする政治の持込み・街頭闘争・地区反戦青年委員会の形成。

六六年以降、いずれも地区反戦青年委員会、産別反戦としてスケジュール闘争の主役をなしたのである。

六〇年安保闘争は、ブントの登場によって青年労働者に希望を与え、日本共産党の地区における分裂を誘発したのである。七〇年安保闘争もやはり、ブントの再建（六六・九）と全学連の再建（六六・十二）が青年労働者に希望を与えた。このような政治状況は、日本の階級闘争からのみ語られるべきではなく、ベトナムの民族解放闘争をはじめ、中国におけるプロレタリア文化大革命や北アメリカにおける公民権運動とベトナム反戦・学生運動、ヨーロッパにおける学生運動など、全世界的規模での実力闘争が闘われた。しかも、既存の共産党の指導を離れて闘われたことに注目しておく必要がある。勿論このことは既存の共産党・スターリン主義と目的的に闘いながら大衆闘争が発展してきたということを意味するものではない。

例えば、ヨーロッパにおいては、サルトルやマルクーゼに代表される実存主義と自己告発型の運動か

ら日本における「ベトナムに平和を市民連合」までその思想は雑多であった。それにもかかわらず、全世界的に一大政治潮流となったことは確かであり、七〇年代以降反近代主義として今なお社会の低流にあって市民運動を個別的に展開している。

ところでここで問題とするところのものは、本格的政治・権力闘争に直面するや否や六〇年代の遺産のことごとくを日和見主義として切捨ててきたことの反省である。本来、政治が持つべき実態のことごとくを切捨てることによって、その特徴とも言うべき権力に肉迫したことの誤りをば明確にしておかなければならない。

我々は敗北した。それは何よりも自らの政治に敗北したのである。我々は徹底してこの敗北から学ぶものである。ここに六〇年代の遺産を取戻すとともに、七〇年代に培ってきた「自己解放主義」（反差別闘争）の思想と運動を新たに獲得してきた。我々の政治展望と独自の政治展開、そして、本格的政治をふたたび可能とする根拠がある。だが、この根拠は太い絆で結ばれている訳ではなく、いまだ分散し孤立し地方化しているにすぎない。ここに、新たな政治潮流の意味があるであろう。さし当たって、課題別に全国的な結び付きが必要であり、全国的な統一した行動が必要である。

全国民的な政治に押しあげるところの全国的な闘争を組織すること、そのような公然たる全国政治新聞の役割は日増しに要求されている。

D　政治的展望とは何か

我々にとっての政治展望とは「世直し」とか、「建て直し」と表現できるものではない。まして、“変革”などでもない。

あくまでも資本主義的生産様式そのもの、帝国主義国家そのものを打倒しつくすところの労働者階級をはじめとするプロレタリア人民権力を樹立する政治でなければならない。

後藤田正晴はその著書『政治とは何か』で、ズバリ権力であると言い切っている。ブルジョアジーは臆面もなく政治について語っている。

あるひとつの体制側の人間にとって「世直し」とか、「建て直し」とか、「変革」としてのよりマシな政治は愚民政策として最もらしいスローガンである。だがしかし、我々は、よりマシな政治を要求している訳ではない。この社会・独占資本主義を根本的にヒックリ返そうとしているのである。建て直すどころか逆立ちさせようとしているのである。言い替えれば構造的な改良など望んでいない。つまり、制度なり、体制とはそのよって立つ生産関係として階級対立を基礎としているのであって、その一部の手直しですむようなものでは断じてあり得ないのである。本質的な解決としてのみ、この階級対立を止揚するのでなければならない。

地域闘争とか自治体闘争を「革命論」とまで理論化したのは長洲一二（『プロ通』十号参照）であった。そして、長洲一二はその理論の実行者としてこの十年間神奈川県知事であり続けているのである。また、かつて一九七八ー九年、三里塚闘争に話合いを持込んだ松本礼二（『松本礼二遺稿・追悼集』長崎浩論文を参照のこと）も地域闘争・地域権力論を展望した。今日の流行ことばで言うなら「対抗社会論」とでも言うものである。

こうした政治屋は、マルクス・レーニンを疑い新左翼の終焉を宣言したのであった。

彼等は、武装蜂起を含む人民の抵抗権・人民の歴史的革命権を放棄したのみならず、理論化することによって現に人民が武装しているにもかかわらずその解除を迫ったのである。

全国政治闘争を媒介とする地域武装蜂起は当然考えられるとしても、国家と正面から対峙しているとき、すべてが話合いで決着つくはずもない。あまりにも自明のことではないか。地域権力とか、二重権力（理論化）とユートピアを展開することは二重の誤りだと言わねばならない。

全世界の一挙的同時革命の旗を投げ捨てたその結果として得たものは全くの一国主義であり、民族排外主義であった。このことは、一国社会主義としてのこの七十年間の歴史が示すところのものであった。我々がこの旗を復権してようやく三十年になるにすぎない。日本階級闘争の戦闘的再生をかけて、世界同時革命の総路線の下に結集するのでなければならない。アレコレの流行の後追いをすることでなく、断固たる革命党の建設こそ問われている火急の任務である。

チェルノブイリ原子力発電の爆発以降、ヨーロッパをはじめとする反原発運動は燎原の火のごとく裾野を広げている。

かつて日本では、一九五〇年代超階級的な反戦平和・反核運動（平和委員会、原水禁運動の原流）が婦人を先頭に反基地闘争とともに燃えさかった。ちょうど今日の現状維持型反原発運動は、あの五十年代にもにた様相を呈しているかのごとくでさえある。

中央権力打倒・全人民全国政治闘争としての実力闘争の革命的息吹は微塵も感じられないのが今日の反原発運動である。

確かに今日の反原発運動は、十年前の反資本主義・エコロジー運動と異なった消費者運動であり、現状維持型大衆運動である。そうした意味では新しいユニークな運動だと言えなくもない。さらに、この運動を分析するに当たって「構造」なる概念を持出すのではなく諸階級・諸階層として分析することでなければならない。そうすれば、どのような階層の人々の消費者運動であるかが一目瞭然のはずである。私が言いたいのは、我々が味方にすべき諸階級・諸階層とは何か、を問うているのである。したがって、闘い方も「パフォーマンス」に始まり、「パフォーマンス」に終わって敵は見えてくるのかと言うことである。自己を表現する手段としてのパフォーマンスが、それ自身が自己目的化されるようなことがあっては、闘いの質的発展を望むべくもないということに他ならない。

「日の丸」を掲げて、民族の滅亡を防ぐため反原発を主張し機動隊とわたりあう新右翼の登場を含めて、今日の反原発運動は確かに新しい運動に違いない。

原子力発電は安全か危険か、あるいは採算がとれるかどうか。こう言った二者択一で迫るには格好の材料を提供している。煽動の手段としては申し分ない有効なものである。危険に決まっているし、

経済的には廃棄物処理費まで含めれば非効率であることは明らかである。しかし、このような反発は、消極的な反発に過ぎないであろう。より本質的な、より根本的な、より攻撃的な反原発闘争でなければならない。

まず、イデオロギー的には、日本共産党に代表される原子力の軍事目的と平和利用論の二分法論法を粉砕しなければならないであろう。二分法によって原子力の平和利用は是認されてきた。しかしながら、科学史を研究するとき、技術の発達は軍事技術の発達としてあった。このことは、古今、洋の東西を問わない真理である。加えて、独占資本主義は自らの利益とその権益の防衛のため国家権力の肥大化・軍事力の強化を計るものである。原子力発電と言えども例外ではあり得ない。

日本独占資本・帝国主義にとってその利益を国際的に長期的に防衛するには、国内市場はもとより世界市場を念頭に置いているのである。かかる観点から、核兵器を射程として原子力発電をつぎから次へと稼働させようとしているのである。したがって、日本帝国主義にとっては、核の再処理と輸送手段（弾頭）の開発・生産へとつきすすむであろう。

だとするなら運動主体にとっては単なる運動論的構築のみならず資本主義批判と帝国主義批判を媒介とするイデオロギーの武装・革命主体の構築こそ急務なのである。また、実力闘争の思想抜きには市民運動も超階級的な現状維持型平和運動にならざるを得ない。

独占資本・帝国主義の打倒・国境の廃止にいたる全世界の獲得を政治展望としないかぎり「新しい社会運動」に参加することは不毛であり、再編することも不可能である。

我々は独力で政治展望を切り拓くのである。その突破口は、階級的労働運動をはじめとして、三里塚闘争であり、寄せ場労働者との連帯であり、外国人出稼ぎ労働者の身分保障の為の闘いであり、国内少数民族、国内植民地解放闘争との連帯、反天皇・「日の丸」拒否闘争である。

我々は流行の後追いすることでも目新しい運動に飛びつくことでもなく、あくまでも自らの運動の継承と発展の為に営々努力するのである。

独力で政治展望を切り拓かねばならない。

我々は、独自に九月二十五日三里塚現地闘争を断固闘い抜くであろう。

我々は、十一月六日、三里塚全国総決起現地闘争に断固として起つ。我々は現地闘争に先立って一〇月政治集会を圧倒的に成功させるであろう。

日本階級闘争を牽引する革命党を創建せよ。

世界のあらゆる革命的人民と連帯し世界党を創建せよ。

「5・21三里塚・東京集会」報告

八四六名結集の下開催された「五、二一三里塚・東京集会」は、スライド「ザ・サンリズカ」から始められた。

ナレーターは「政府は農民の存在と彼等の不屈の精神を見過ごした。農業が彼等の生活と地域社会の中心だった。それが農村の文化を形作り長い歴史を培ってきたそれは両手ににぎらされた札束ぐらいで簡単に引渡せる物ではなかった。ある農民はこう言った『私有財産として土地を切売りできても土という物を売ることはできん、おれたち百姓と土は切離す事などできんのだ……』」と語った。集会は素朴な農民が如何にして闘いへと立上がっていったのかを語るなか始められた。

続いて坂志岡団結小屋の大塚さんから、東山薫さんの裁判支援テレカ購入へのアピールが行われ、続いて、釜ケ崎日雇い労働組合・山谷派遣団からの緊急アピールが行われ、山谷の悪質業者「藤伸興業」との労災交渉を契機とした権力の不当な弾圧行為が告発糾弾された。次にワクワクツアーの平井さん、東峰粉曳きハウスのバンダさんとアピールが続き、「三里塚の夏」の上映へと進んだ。

ここで第一部は終了し、第二部の開会挨拶を熱田代表が「御承知のように報道、あるいは色々なキャンペーンが目にされておるけれども、我々はそういうものに屈するものではなく、木の根の用地内、もっとも重要なポイントであるところの木の根、小川源さんを中心といたしまして、それを防護しながら闘いをひいている現在であります。こういうなかで様々な騒動がありましょうけれどもけっして屈するものではない。所期の目的を達成するため…闘いを進めるものであります。」とまとめ、龍崎さんと寺内さんが同盟の若いかあちゃんを代表して発言にたち、「三里塚も二期工事が本格的に始まりましたし、開港十周年ということで、テレビ等マスコミを使って二期工事のキャンペーンを行っております。私達にとって苦境といえば苦境なんでしょうが、いままでの政府空港公団のやり方、それをずっと見てくると、私達はやり方にがまんできないし、それにこれ以上農業を破壊させたくないという思いが募るばかりですし、そういう思いを込めて毎日野菜づくりに専念していきたいと思っています」と語った。

ここで集会は講演に移り、まず、三里塚顧問弁護団の清井礼二さんからはじまり、大野和興さん、内海愛子さん、高木二三郎さん、と続いた。

■清井礼二さんの講演

まず、空港の三里塚決定に至る閣議決定自体が憲法の保証する適正手続き条項に違反するものであり、公聴会を開かずに行われた空港建設の違法性を批判するとともに、外国による空港アクセス批判に対応し、運輸省が二十三年前の事業計画を再び暗黙裡に変更する可能性があり、注意深くみつめてゆく必要があることを述べられた。そして「結局のところ、用地内に農民の生活がのこるという現実があるわけです。それが、三里塚闘争の勝利の根拠である。公聴会を開催しないという意志決定から始まる大きな違法性を帯びた空港に対する闘いは用地内で生活し、頑張っておりば、かならず粉砕できるというのが弁護団の見通しです。一〇年前「ボタンの掛違い」と言わしめたように、もう一度「空港

をやめます」と彼等に言わせるまで共に頑張って行きたいと思います。」と結ばれた。

■大野和興さんの講演

昨今吹聴されている「国際化」というものが、いわゆる中曽根の主張した新国家主義と表裡のものであることが述べられ、また先進資本主義国の中で唯一日本のみが穀物自給率を低下させている国家であることが指摘され、農産物輸入に於ける三里塚空港の比率が近年とみに拡大していることも指摘された。

さらに八三年以降、日本の農作物が縮小再生産に移行し、八五年以降その傾向にさらに拍車がかかっていること、また、政府の意図的な政策もあって農業所得が八五年以降ぐんぐん下がっていることが述べられた。

世界的に見て、八〇年以降、穀類を中心とした農産物過剰状態にあり、現在においては、農産物の輸入国＝先進工業国、開発途上国＝農産物輸入国という図式が日本を例外として指摘できること、そうした中で米欧を中心とした米のダンピング輸出が日本及び第三世界の農業を破壊してきていることが語られた。日本への農産物市場国際化・開放要求が世界的な農業市場再編成の一貫であることを述べられ、農業問題が日本一国だけで解決できるものではないこと日本の農民と第三世界の農民との連帯が重要であることを述べられた。

■内海愛子さんの講演

「ジャパユキ」さんという言葉がアジア女性への限りない蔑視を含むものであり、「アジアの働く女性達」と語られ、またバイシュンを「買春」としたのは、買うほうの責任を問うものとしてそうした旨、が明らかにされた。続いて観光資本によるバリ島の侵略や、ボロブドールの開発における、日本提言の公園建設による住民の排除の実態が語られた。また、成田からの旅客機を受入れるためにアジア各地の空港が建設され、その建設過程において成田をはるかに越えた酷い状況が現出している。こうした日本資本主義の海外侵略の結果としてアジア人民の生活圏の破壊があり、その結果が今日に於けるアジア人労働者の流入であることが述べられた。そして、こうした中で、「成田の闘いの象徴はアジアの人達にとってですね、自分達がいま困難な状況の中で闘えない、しかしそれをどこかで日本との闘いに繋げたいと思っている人達にとってもですね貴重な心の支えになっているのも事実だと思います。このことを一つお伝えして終わりたいと思います」としめくくられた。

■高木二三郎氏の講演

まずプルトニウムというものが1gあれば日本人全体の「許容量」に達するぐらいの毒性を有する物質で有ることが指摘され、新たな2日米原子力協定ではこのプルトニウムをいわゆる「安全上」の必要から「空輸」に移す事が指摘され、また新協定では核物質防護条約の下、国内法の改訂がなされ国際版国家機密法的状況が現出しそうなことが指摘された。すなわち原子力を安全に運用するという観点から、侵入者から核を守る形へと行政の力点が移ることが指摘されたのだった。そして、このプルトニウム空輸の受入れ基地として、三沢空港と成田がのぼっていること、また、六ケ所村が再処理施設との関係から見ても今のところ不適合と思われる事を考えても成田が当初選ばれる可能性の高いことも指摘された。氏はまず、再処理へと英仏へ使用済み核燃料を持出すことを許したこと自体を問う必要があることを述べられ、英仏米で起きている空輸反対運動との連帯の必要性を述べられた。

集会は次に鎌田慧さん、堀越昭平さん、石毛博道さんによる座談会へと進んだ。

まず座談会は、堀越さん、石毛さんの自己紹介と、三里塚闘争へと係わるまでの経過が語らることとなり、さらに、堀越さんから反対同盟へ加わるまでの経緯が語られた。それによると空港問題がおこる二年ほど前からシルクコンビナートというものが初められ、桑植えと工場労働の両立といったことが一帯で行われるようになったこと、堀越さん自身は、こうしたシルクコンビナートという考え方に反対で、加わらなかったことと、またさらに空港が三里塚に閣議決定された後、反対運動を初めたのがシルクコンビナートをやっていた人達が多かったので信用せず、当初は同盟に加わらなかったことなどが話された。またさらに、空港に反対し続けるという点からも農業展望を切開くことがやはり必要であり、「親父は反対だといっているけれど、ただ反対だだけでは子供はついてこないだろう……やはり自分の反対運動をなしとげるにはどうしても自分の息子にも農業後継者としてきちっと議っていきたい」と語られた。

一番印象に残っていることはという鎌田さんの質問に対しては、石毛さんは六七年の外郭測量闘争、そして七〇年強制立入り測量阻止闘争、七一年第一次、第二次強制代執行阻止闘争と、三里塚闘争が最高に盛上がっている時、三宮文男さんの自殺があった、この事がやはり、青行を反対運動にしばりつけたといってもいいのではないか、「木にぶるさがっている、彼の体を降ろすため、彼の体を抱いたときの恐ろしさがいまだに忘れられない」と語っていた。

また最近の機動隊の対応を振返ってみて、イヤガラセが多くなって来たこと、これは、現地に住む農民を住みにくくして、二期用地内から排除しようとする攻撃であることを述べられた。

最後にこれからの運動の方向性として、今までどうりにのんびりとやっていくことと、政府が「話合い」といいながらも、現実にできる工事を進めることによって農民への恫喝を繰返していること、三里塚に空港が閣議決定されたことが「ボタンの掛け違い」であることは、いちおう定着していること、これを基礎としつつ、空港をストップに追込み、そのことが本当の「話し合い」の前提であるという世論をつくってゆく、恫喝に屈せず闘いつづけるということが語られた。

次に現地支援連アピールが続き、小川源さんへバトンタッチがなされた。

源さんは「二二年間の闘いの中で……大勢の方が犠牲になっておるけれども……そうした方々に対しても……二十年近い闘いそのことを殺さないで、このまま生かして、勝利するまで闘ってゆきたい」と語られた。

集会は、この後集会参加の同盟全員の舞台への登場と、菅沢事務局長の団結ガンバローの音頭の下、終会を迎えた。